
[総合地域研究所 平成28年度「共同研究」報告]

Glocalityを考えるAction Learningの試み

フード&アグリ、観光の“場”としての佐倉を歩く

代表：村川 庸子 (敬愛大学国際学部教授)

研究分担者：山本 健 (敬愛大学国際学部教授)

田口 功 (敬愛大学国際学部教授)

高田 洋子 (敬愛大学国際学部教授)

山口 政之 (敬愛大学国際学部教授)

田中 未央 (敬愛大学国際学部准教授)

佐藤 佳子 (敬愛大学国際学部准教授)

はじめに

昨年度は、共同研究「佐倉市との地域連携事業に向けての試み」で総合地域研究所の助成を受けていたが、代表の村川の体調不良や近親者の不幸などが相次ぎ、数回、小規模な活動は行ったものの本格的な活動を実施するには至らなかった。ただし、細やかではあるが、数年来続けてきた「フード&アグリ」等の活動を、佐倉市を中心に継続した（報告書は提出・発表済）。学生の反応も良く、佐倉市役所、水土里ネット印旛沼など地元の団体・個人との関係も少しずつ確立してきたことから、今年度も佐倉をフィールドに共同研究「Glocalityを考えるAction Learningの試み—フード&アグリ、観光の“場”としての佐倉を歩く—」を起ち上げた。今年の活動は、キーワードを「フード&アグリ」「歴史」「観光」「グローカリゼーション」に絞ることにした。企画段階から学生を参加させる、Active Learningの新たな活動の形を探った。

活動は、佐倉市と本学の包括的連携協定を土台としたプロジェクトと、かねてからお世話になっている水土里ネット印旛沼の高橋修氏関係のプロジェクトの二系統で進めることとした。前者は「観光」を、後者は「食と農」を中心とした活動となった。

観光：幕末の佐倉は長崎と並び称される、西洋文化の花開いた地である。老中堀田正睦を始めとし、順天堂の佐藤泰然、次男の良順（初代陸軍軍医総監）、五男の林薫（外務大臣）や津田梅子の父である農学者津田仙など数多の人が日本の近代史を彩っている。佐倉の歴史を紐解き、その良さを見直す作業から始めた。将来はインバウンドの観光客誘致のための多言語による佐倉紹介と、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けた英語のボランティア通訳を目指す学生の実践教育の場にしたいと考えている。

食と農：印旛沼周辺の農業用水を管理する「水土里ネット印旛沼」、「印旛沼流域を楽し

む会」や農業の六次産業化に取り組む企業との交流を通して、「食と農」の glocality を考えてきた。水土里ネットは毎年のように海外研修生を受け入れており、国際学部の留学生が通訳を務めたことがある。「印旛沼流域を楽しむ会」もこの周辺に観光客や外国人を招じるイベントを計画している、グローバルを視野に入れた活動を続ける団体である。

敬愛大学国際学部は今年（2017）、開設20周年を迎える。“Think globally, act locally（国際的に考え、地域で行動せよ）”と唱えながら手探りで続けてきた教育活動も仕上げの段階に入らなければならない。“Think globally, act locally”とは何か。その実現のために、大学に何ができるのか。それを実践するために、教員と学生はどのような知識と技術を必要とするのか。考えていきたい。

今年度の活動記録

（1）7月7日 水辺リング「水辺で乾杯2016」

今年度の活動開始。印旛沼流域水循環健全化会議の「水辺で乾杯2016」という催しに参加する。7月7日の七夕の夕方7時7分に佐倉ふるさと広場に集合、という案内を印旛沼の高橋氏からいただき、授業終了後、学生4名と駆けつける。

発起人の挨拶には次のような会の目的が記されている。高度経済成長期にゴミ捨て場と化した川は随分綺麗になっているが、かつての「川は危ない。良い子は近づくな」というネガティブキャンペーンの影響もあって、水辺が生活者から遠いものになっている。「そんなパラダイム（規範・常識）をシフトするには、川を楽しむ仕掛けがいくつか必要で、例えば水際にアクセスしやすくしたり、川沿いをランニングできたりするハード整備もあるのですが、川でこんな楽しいことがあるというソフトも同じくらい大切だと思います」。

チラシには『1万人がタナバタに乾杯』とあったが、実際に集まったのは30名前後だった。高橋氏に「これで1万人ですか」と問うと、「いや、本当にそのくらい集まっていると思います。あちこちに少しずつ集まっているので」とのこと。1ヵ所に1万人を集めるのではなく、親しい人たちが近くの水辺に集まって楽しむ。世の中の仕組みを変えるには、こんな肩ひじを張らない、無理のない形が効果的なのかもしれない。

活動は1時間くらいで終了し、人々は三々五々散っていった。その後、学生と私は誘われて夕食会に参加した。8月24日の催しに向けての顔合わせ会となった。

（2）7月23日 佐倉の町を歩く①

佐倉市役所企画政策課の協力を得て、「佐倉を歩く」研修を実施した。

当初は10時に佐倉に到着する予定だったが、朝の交通渋滞で佐倉到着が遅れ、さらに用意した大型バスは城下町の狭い道路では小回りがきかず、市営駐車場からの徒歩の移動でさらに時間をとることになった。「武家屋敷」「旧堀田邸」「順天堂記念館」ではボランティアの方に待ってもらっていたが、見学の時間が短くなってしまった。「佐倉草ぶえの丘」への立ち寄りも次回に譲ることとした。

①武家屋敷：江戸時代の雰囲気を残す土塁と生垣の通りの奥に、鐮木小路の3軒の武家屋敷——旧河原家、旧但馬家、旧武居家——が並ぶ。かつて敬愛の佐倉キャンパスの

寮があった場所に近い。関東で最大級の武家屋敷群と言われている。近くに西村茂樹（明六社主宰、日本近代道德教育の佐倉藩の先駆）や児玉源太郎（旧徳山藩士、佐倉連隊長、台湾総督）の旧邸跡も残されている。城下町は、武士の居住地域と商人の居住地域に分けられており、武家屋敷は藩の所有で、俸禄に応じて割り当てられた、いわば「社宅」であったとの説明があった。屋敷の広さばかりでなく、間取りや壁の色まで身分による違いが見られる。

②房州屋（船もりそば）：100年を超える歴史をもつという蕎麦屋で「船もりそば」ランチ。昼少し前に房州屋に入るようにと言われたわけが、よくわかった。我々のうしろに大勢の人が並んでいた。こしのある蕎麦であった。

③堀田邸：幕末の老中、堀田正睦の後継、正倫が建てた明治中期の住居。洋風建築が日本に入ってきた頃は、洋館を建てるのが一般的であったが、堀田邸は一見純和風の建物に、西洋式工法が随所に採り入れられている。かつては周囲の水田を借景にしていたが、現在は樹々が育って周囲の近代的な建物を隠しているため、映画やドラマの収録にしばしば使用される。正倫は農業と教育を重視したと言われ、「国力の源泉は農業と教育との固い信念に基づき、佐倉の地に永住を決意し邸宅を構えた後、明治30年には邸内に当時の千葉県を代表する研究機関として堀田家農事試験場を作っている」（井上昭一「古今建物集」〈<http://yuwakai.org/dokokai3/idesanzuihitu2007/idesan20100916/kyuu-hotta-tei.html>〉）。佐倉中学（現：佐倉高校）の敷地（約28,000m²、8,700坪）の購入費と校舎の建設費全額を寄贈したのも正倫である。

筆者はこれまでに数回、堀田邸を訪れたことがあるが、その都度新たな内容が加えられている。ボランティアの方々が研究会を重ねていらっしゃるのと、何度でも足を運びたい場所である。

④順天堂記念館：「西の長崎、東の佐倉」と称されたのは、この地の蘭方医学の発展があったからだという。「蘭癖」と呼ばれた堀田正睦の招きに応じ江戸の薬研堀を模して佐倉に来た佐藤泰然が開いた蘭方医学研修所兼治療所が順天堂の開祖となる。手術の道具（骨切り鋸など）や手術の料金表、手術の承諾書も残されており、当時の医療の「近代化」は想像以上であった。麻酔薬がまだ開発途上で、できるだけ使わないようにしていたとのこと。「とりあえず、手術を始め、気絶してしまえばその後の痛みは感じない」、との説明に学生からは「現代に生まれて良かった！」の声が出ていた。

⑤印旛沼 ふるさと広場：最後は印旛沼の畔のふるさと広場で一休み。オランダとの関



ふるさと広場にて

係を記念した本格的な風車と、一面のひまわりの花が迎えてくれた。

なお、この研修の企画は佐倉市企画政策課の上野裕子氏が作成され、当日は同課佐倉プロモーション課の山口氏、東城氏が付き添って下った。土地勘がなく、時間に追われる私たちには大いに助けとなった。余談ではあるが、当日御案内いただいた山口真宏氏は、一昨年、総合地域研究所主催のシンポジウムで講演を聞き、今夏に愛媛県今治市を訪ねて下さったという。大学の細やかな試みが、佐倉市と今治市（愛媛県）を結んだことが確認できたことを嬉しく思った。

（3） 8月24日 「親子で学び遊ぶ印旛沼」

主宰者側代表と学生の数回の話し合いを経て、8月24日、ミレニアムセンター佐倉（京成佐倉駅前）で、「親子で学び遊ぶ印旛沼：トキと田んぼと生きもの」というイベントを手伝うことになった。夏休みの子供たちを集めて、自由研究に向けた指導をしつつ、環境保護への意識を育てる、という目的をもった試みであった。当初、地元の米作りを紹介する「お米、農家の知恵」のブースを担当することが求められていた。高橋氏からのメールには「トキも生きものも、田んぼがなければ生きることができません、お米を食べなければ田んぼの必要がなくなり……田んぼがなくなればトキも生きものも消滅、日本人の心にも、地域の環境にも悪い影響が……。堂々巡りのようですが、どれにも関係するおもしろいブースだと思います」と記されていた。具体的には「米粉加工品の紹介（試食・つまみぐい可）と第六次産業の紹介」を任されることになっていた。

その後の話し合いのなかで、小学生の教育に関わるという、より大きな役割を担うことになったと聞いて、少々心配になった。迷路を作って、誘導しながら問題を解かせるという案を出したようである。国際学部でも子ども学科の学生は小学生の扱いに馴れているが、国際学科の学生はどうだろう、等々、心配はあったが、ここは敢えて関わらないことに決めた。

「国際学部でアグリ」の活動を開始して以降初めて教員が関わらず、学生主体で行った行事である。教員が主導する活動では学生の関わりが消極的なものになってしまう傾向がある。今の大学生は忙しい。大学教育は4年間で、大学生生活に漸くなれてきた2年次から活動を開始しても、3年次後半からは専門科目の学修や就職につながる活動で忙しくなり、4年次はまず就職活動を優先しなければならない。リーダーシップをとることができる学生を育てることも、年々難しくなっている。今回、水土里ネット印旛沼（土地改良区）の高橋



凶暴な外来種のカミツキガメは意外な大きさであった

修氏（水土里整備課）に大変お世話になったが、学生たちの協力もあって、少なくともその第一歩は踏み出せたように思われる。

当日は残念ながら雷雨で、人出はいま一つであった。それでも参加してくれた10人の学生は大学で見ているより遥かに澆漓と動いていた。「印旛沼」をもじった「赤インバー」との写真撮影も子供たちには人気であった。その後の関係団体の報告会では司会も務めてくれた。来年は我々の研究報告も行いたい。

（４） 11月27日 収穫祭（下総トキ誘致懇談会）

先述の高橋氏も関係する下総トキ誘致懇談会は、「印旛沼の水質浄化と印旛沼流域の子どもへの豊かな水環境の実現のため」平成27年に発足した。その年度末の集会に参加した。「トキ＝朱鷺」の誘致と聞いていささか奇妙な感じがしたが、「印旛沼流域80万人の市民が、沼の汚染度や飲み水としても全国ワーストワンであることを知らない」ことから、「昭和28年まで千葉県に生息していたと言われていたトキの誘致運動をおこすことで、流域の市民に印旛沼の現状に関心をもってもらおう」というのが設立の趣旨であった（太田勲会長「収穫祭のお知らせ」より）。

収穫祭（於：青菅会館）には教員2名と学生4名（内、2名はネパール人学生）が参加した。ユウカリが丘線の中学校駅で拾ってもらい、耕作放棄された田んぼの畦道を歩き、以前、「アグリ」の活動で訪れた三門増雄氏（下総トキ誘致懇談会副会長）の田んぼで「あいがも農法」の合鴨を見る。会場では平成28年度の事業報告をうかがい、その合鴨を使った鍋と合鴨農法で育てた米のご飯、お餅をご馳走になった。

印旛沼の水は上水道、農業用水、工業用水に用いられている。上水は佐倉市白井で漂流水を取水し、千葉県柏井浄水場でオゾンと活性炭による高度浄水処理をして、市川市、浦安市全域と千葉市、船橋市、習志野市、市原市の一部、湯水時は佐倉、八街、富里、四街道、酒々井にも供給される。全体で水道人口は千葉県総人口の約4分の1に相当するという。

筆者も印旛沼の水質が日本でワーストワンということは聞いていた。大学でその水を飲料水としていることも認識していた。



合鴨農法に使われた合鴨



鴨鍋



懇親会

だが、奇妙なことに、日本でワーストワンの水を飲んでいるという意識は薄く、なんとかしなければ、という気持ちもなかった。水が汚いというイメージは人々を遠ざけ、沼の汚染には注意が払われない。一朝一夕で片づく問題ではないが、下総トキ誘致懇談会のゆるやかな催しは、人々の注意を印旛沼に向けさせる確実な一歩であるように思われた。

学生のレポートより：会長さんの挨拶で、「印旛沼のことに全く関心がない人が多い」ということを聞きました。……これからどうしていけば水質が改善されていくのかを考えていかなければ……普段の生活との関係性を考えるととても良い勉強になると思います。……（略）

鴨鍋の味は、噛んだときに肉本来の旨味がつまっており、汁にも出汁として含まれ、スープの美味しさをより引き立てる味です。……あいがも米で炊いたご飯は、香りが違いました。甘さがとても強く、食感は少し硬めですが冷めても美味しいので、今日出された海苔や漬物とも相性抜群です。
(1年 矢村将希)

(5) 2017年1月6日 佐倉の町を歩く②——佐倉市を多言語で紹介するプロジェクト

7月23日の佐倉研修が学生に好評であったことと、盛り沢山で消化不良に終わった反省から、焦点を絞って、再訪することにした。9時30分に大学をバスで出発、佐倉順天堂記念館で1時間余を過ごし、国立歴史民俗博物館に移動して昼食をとった。

学生のコメント：展示されているものの中でとても驚いたのが、手術をする前に同意書を書く紙があったことである。私の勝手なイメージだが、ずさんな感じで医療行為を行っているのかと思っていたからである。なぜなら医療がそんなに発達していなかった日本で、最新の医療知識を海外から学んだとはいえ、ただ単に手術をするだけで、亡くなっても責任をとることはないのかなと思っていたからだ。同意書がきちんとした証拠にもなるので、患者が手術中に亡くなっても大丈夫なように徹底していることがずっと昔から行われ、現在につながっていると思うと感動した。(4年 大越俊幸)

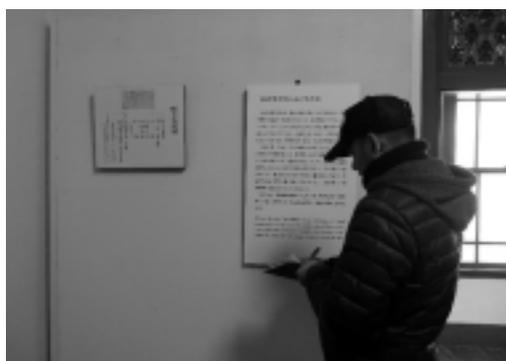
学生のコメント：医者としての要求は非常に高い。館内にはオランダ語を日本語に翻訳した本はたくさんある。順天堂では生徒たちは医学を勉強する前にオランダ語を学ばなければならなかった。しかし、当時は辞書がないので数名の生徒たちはひとつの本を読んで、一緒に研究し、翻訳していた。……生徒たちは毎日勉強し、週末もない。さらに、医者としての活動の規範にするため、順天塾規則が設けられた。順天堂の学生は医者になるためにたくさんの努力を払わなければならなかった。実は現在も同じで世界中の医学部の授業は大体5年間だ。過去でも、現在でも医者に対する要求が普通の人たちより高いことがわかる。これらの展示を見た後、私の医療従事者に対する尊敬がさらに高まった。
(2年 王堯玉)

国立歴史民俗博物館では、まず、久留島浩館長に館所蔵の順天堂関係の資料の歴史的意味を中心に話をうかがった。この地に現れた、堀田正睦という稀有な国際感覚をもった藩主が家臣に蘭医学や蘭学一般を学ぶことを奨め、教育環境を整えたこと、一般の庶民の教育水準も高かったことが、順天堂出身の優れた医療者を育て、さらに幕末から明治にかけてこの地から世界を目指す人材を輩出させたものと思われた。

教員のコメント：近くに住んでいながら、順天堂記念館にはまだ行ったことがなく、興



順天堂見学開始



ネパールの学生も熱心にメモを取る



研修の参加者



講演中の久留島博館長

味津々で見学しました。なぜ佐倉で西洋医学の芽が生まれたのかは、久留島館長の話でよくわかりました。江戸時代後期は生産力が上がり、民衆の教育レベルも上がったからという説明は明快でした。その中で堀田正陸という蘭学好きの殿様が出たという二つのことが重なってのたぐいまれな現象だったようですね。 (田村孝学部長)

館長の講演の後、博物館のバックヤードツアーをお願いした。普段我々が見ることのない、資料の搬入から燻蒸、保存までの現場を見せていただき、詳しい解説を受けた。こちらも学生の反応は良好だった。

学生のコメント：研修に参加し、普段見られないような場所に行くことができとても刺激になった。歴史を学ぶのは嫌いではないが、記憶に残らなかったり、印象に残らずにすぐに忘れることが多かったが、佐倉順天堂や博物館に行き、実物の道具や資料などを見ながら歴史を学ぶことはとてもおもしろく感じた。また、ただ昔のことを知るだけでなく、現在と比較して、同じところや大きく違うところのポイントを見ることで知識が深くなったと思った。 (3年 伊藤美雪)

(6) 2017年2月8日 佐原の町を歩く

風邪やインフルエンザで参加者が大幅に減ってしまったが、予定通り、佐原での研修を行った。佐原は2016年に佐倉市、成田市、銚子市と共に「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」として日本遺産に指定された。2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催に向け、千葉県が千葉の魅力を国内外に発信しようと申請したものだという。さらに、昨年暮れ、佐原の「山・鉾・屋台行事」がユネスコ無形文化遺産への登録が決定

した。2011年の地震では、地震と液状化で大きな被害を受けたと聞いていた。重要伝統的建造物群保存地区に指定された旧市街の土蔵造りの商家も瓦が落ち、壁が崩れたという。特に町の中心を流れる小野川は液状化による被害が大きかったが、現在は急速に復興が進んでいる。

佐原は利根川の水運で栄えた町である。江戸時代にタイムスリップしたような町並みが続く。下総台地の北端に位置し、北側に中世まで香取の海（浦）と呼ばれる内海が広がっていた。現在の霞ヶ浦、北浦、印旛沼、手賀沼を一続きにした広大な内海で、岸に多くの河港が並び、水上交通が盛んであった。

鎌倉・室町時代、一帯は千葉氏一族の矢作城主国分氏の支配下にあったが、天正18（1590）年、豊臣秀吉の小田原征伐に合わせて徳川家康に攻撃され、矢作城は落城、家臣だった伊能氏が帰農して佐原新宿を開拓した。著名な伊能忠敬の先祖である。

江戸時代、家康の関東入りで、佐原は鳥居元忠が拝領したが、まもなく転封して、幕府の天領と旗本知行地になる。幕府による利根川東遷事業で、現在の河道に改修され、利根川にそそぐ小野川と香取神宮に続く街道筋の交差点（忠敬橋）を中心に町並みの形成が始まった。佐原は利根川筋の主要な河湊として、東北諸藩の年貢米や周辺地域の物資の集積地として繁栄することになる。房総半島を回る海上輸送の危険を回避し、船運行の距離を短縮できて、東北地方や北関東の物資が利根川水運を活用して江戸に運ばれることとなる。銚子、小見川、関宿、野田、流山、行徳、浦安はいずれもこの利根川水運の河川港として栄えるが、その重要な中継拠点となったのが佐原であった。「お江戸見たけりゃ、佐原へござれ 佐原本町 江戸勝り」とうたわれたという。現在の「小江戸」の町並みはその名残である。

利根川東遷事業の目的は「江戸を利根川の水害から守り、新田開発を推進すること、舟運を開いて東北と関東との交通・輸送体系を確立することなどに加えて、東北の雄、伊達政宗に対する防備の意味もあった」と下記HPにあるが、これまで私の頭の中でバラバラに散らばっていた千葉の各町が、かつての水系の中で意味をもっていたことに気づかされた。

研修は伊能忠敬記念館から始まった。伊能忠敬（1745 - 1818）は日本国中を測量し、実測による日本地図を完成させた人物である。伊能家に養子に入り、家業（醸造）に勤しみ、家督を譲り隠居した後江戸に出て測量法を学び、55歳から71歳まで全国を回る。記念館には伊能図（1821年に完成した「大日本沿海輿地全図」など）が展示されており、風景画が描き込まれた絵のような美しさに思わず見とれてしまった。

忠孝は天文学などにも造詣が深く、購入した書籍のリストなども残されている。佐倉だ



利根川の東遷

国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所HP
(<http://www.ktr.mlit.go.jp/tonejo/tonejo00185.html>)

けでなく蘭学が千葉の片田舎にも浸透していたことに気づく。当時、ロシアの南下に備え海岸線防衛を強化するため蝦夷地の測量と地図作りが急がれていた。幕末、シーボルトが持ち出そうとして国外追放に処され、これを助けた幕府天文方の高橋景保らが処分されたシーボルト事件も、伊能図のコピーをめぐる事件であった。日本の「国際化」の揺籃期の様が見えてくる。

参加した学生の一人は九十九里町の出身



復興なった小野川沿いの家並



で、忠敬の生家に近かった。子どもころから銅像の写生などを行っていたが、彼の具体的な仕事を見たのは初めてだったと興奮気味に語っていた。

佐原の町歩きには市のボランティアガイドをお願いしていたが、偶然にも敬愛短期大学の元学長の伊藤勝博先生の奥様が担当して下さった。郷土に誇りをもっておられること、地震の後の復興、日本遺産や世界文化遺産の登録を喜んでおられることが全身から伝わってくるような気がした。「また来てみたい」という学生たちの言葉に我々も元気づけられた。



伊能忠敬旧宅にて

(7) 2017年3月12日 津田塾大学・敬愛大学・佐倉市コラボ講演会 「佐倉の国際性——津田仙から梅子へ」

共同研究の今年度最後の催しは、3月12日に開催された佐倉市民カレッジ公開講座 津田塾大学・敬愛大学・佐倉市コラボ講演会「佐倉市の国際性——津田仙から津田梅子へ」であった（於：佐倉市中央公民館）。第一部は津田塾大学学長の高橋裕子氏の講演「文明開化期に生きた女性——津田梅子と父仙」、第二部は「佐倉の国際性と仙の生きた時代」と題して高橋学長、内田儀久（佐倉市史編纂委員）、山本健（本学国際学部教授）、村川庸子（本学国際学部教授）の4名をパネリストに、進行を高田洋子（本学国際学部教授）が務めた。当初定員は200名ということだったが、最終的に申込みは364名に達し、大盛況であったが和やかな雰囲気の中で行われた。蕨佐倉市長、教育長を初め佐倉市役所の方々、津田仙の子孫にあたる方々も参加下さった。

津田仙は佐倉藩士の家に生まれ、「蘭癖」と仇名された堀田正陸の時代に藩校で教育を受けている。黒船来航の折に寒川で防御に当たった経験から進んだ西洋文明に関心をもち、英語を学び、慶應3（1867）年、軍艦購入のため米国に派遣された小野友五郎一行の通訳として渡米している。米国での見聞・経験に強い刺激を受け、帰国後は「農学者、教育者、キリスト教的企業家、慈善事業家」として、特に農学と教育の分野で大きな功績を遺す。津田塾大学を創立した津田梅子は彼の次女で、6歳の彼女を日本初の女子留学生としてア

メリカに送り出したのも父仙であったと言われている。

パネルディスカッションでは村川が「仙の見たアメリカ、そして日本」、山本が「津田仙の時代」、内田氏が「佐倉の国際性と津田仙」をテーマに話題を提供した。内容が多様で、一人当たりの持ち時間が15分と短かったこともあり、不消化な部分は残したが、仙という人物、彼を育てた「佐倉」に様々な角度から光を当てることはできたのではないだろうか。参加者のアンケートも概ね良好と聞き胸をなでおろしている。本学教員3人の間でも何度か意見交換の会をもち、関心は高まっている。できれば学生も巻き込み、さらに研究を進めることができると考えている。

なお、集合時間の1時間前に佐倉に到着した村川は、佐倉高校の地域交流施設の鹿山文庫を見学した。佐倉藩の藩校（佐倉学問所は1792年開設）や順天堂関連の資料が保存されている。我が国初のヨーロッパ語辞書「ハルマ和解」をはじめとして、植物学など洋学関係の貴重な資料が多数所蔵されており、その一部が公開されている。千葉の歴史に興味をもつ学生が徐々に増えてきていることから、今後の研修の場に加えていきたいと思う。



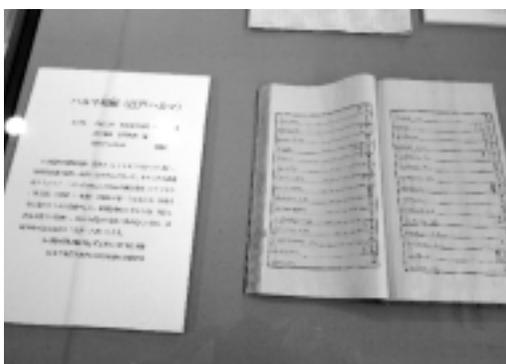
講演会



津田塾大学学長・佐倉市長・津田仙の子孫の方々と



藩校「成徳塾」の扁額



ハルマ和解

むらかわ・ようこ Yoko Murakawa
 やまもと・たけし Takeshi Yamamoto
 たぐち・いさお Isao Taguchi
 たかだ・ようこ Yoko Takada
 やまぐち・まさゆき Masayuki Yamaguchi
 たなか・みお Mio Tanaka
 さとう・けいこ Keiko Sato